

PTA改築委員と原田先生との懇談から

6月13日(土)学校公開での参観、研修会ありがとうございました。講演会講師の特総研原田公人先生とPTA改築委員と原田先生との懇談会の様子をお知らせいたします。

- ・実際に学校を造るのはその学校を含め県として話し合いを進めるもの。

共有できる部分と、障害の特性で別にした方がよい部分を明確にした方がよい。学習はカリキュラムを分けて行う方がよい。

障害種が異なると様々な配慮も必要である。どうやって融合させるかが難しい。どの学校も苦労している。でも、「困った。困った」ではなく、どう活かすか。初めてのことなので想像できないことが多いが、いずれにしても「ろう学校」が建つということは、聾教育は大切に考えられている証拠である。

地域に学校をどう根付かせていくか検討したい。地域の方がろう学校を活用できる場にしていく。それが、ろう学校の子にとってもマナーなどを学ぶ良い機会に出来る。

利用した卒業生や同窓会の方の意見も十分聞いていく必要がある。ろう学校を地域の方に開放することも大切。開かれた学校にするため、またろう学校を理解してもらうためには、地域の方にも解放する場所(体育館等)を考えたい。

校舎は明るく落ち着くような作りに。子どもたちは長い間この学校でお世話になる。幼稚部・小学部・中学部・高等部の発達段階に合わせて、校舎内の色調を変えたり、玄関を変えたりすることも1つの方法である。聴力検査室は聾学校の中心となるので大事に考えたい。

字幕挿入等ボランティア活動を中心にPTAが活動する部屋も大切にしたい。他障害の学校と一緒にする場合は校内できちんと分けておく事が必要。

必要なことはきちんと要求する。

後日追加で工事することは不可能に近いので、将来を見通し、必要になるであろう各種配線は各部屋に通すことを大切にしたい。

他の国では、特別支援学校をなくす方向で考えている国もあるが、少なくとも日本は残す方向で考えている。

特別支援教育とは『一人ひとりの子を大切にしていこうということ』。『聾教育の大切さ』をもっとアピールしていったらいいと思う。

聾教育の特性として早期教育があげられる。聴覚障害の在籍幼児生数だけが問題にされているが、現在の調査によると、地域で学ぶ中・軽度難聴者の教育が十分になされておらず、ろう学校での教育が求められるようになると考えている。支援の必要な子ども全てに支援できるよう工夫

して設計することが大切。

八戸は盲学校と聾学校が一緒になったが、完全に半分にきれいに分かれた校舎になっている。それぞれに配慮する設備がある。お互いに理解し合うことが大切。

札幌のときは、やはり老朽化していた。移転改築だったので移転先の町内会に行って説明をしたり、交流する機会を作ったりした。地域の方に理解され、支援していただくことがすごく大事である。保護者と教職員で時間の限り考え、話し合った。まめに情報も伝えあった。

聴覚障害教育に必要な施設など、設計する側や工事する側が知らないことも多いので、互いに理解し合いながら進める事が大事。ループが必要というと、その部屋だけとってしまうことが多い。それぞれの立場の人に何度もろう学校に来ていただくとよい。

部屋の配置を考えると、それぞれの担当者を明確にしたい。また、その部屋だけでなく、周囲への配慮も考えること。

部屋を造るときは、保護者にも意見を聞き、それぞれの年齢に応じ十分配慮すること。また、母子控え室も幼稚部と小学部での親のニーズが異なることが分かった。幼稚部は授乳室が欲しい。小学部は相談できる部屋が欲しい、等その時々で仕切れるような間取りも大切。

相談室は色々な想いを持って訪ねてくる保護者がいるので、スペースも広く取り、ゆったりと落ち着ける場所にしたい。

改築に向けては、地域の方、保護者、その他関係者に、こまめに情報を提供していくことが大切。

等のご意見をいただきました。終わり際に「保護者が声を出し、力を合わせ、頑張っていくのは、とても大切なことで、それができていることは素晴らしい。」と仰っていただきました。改築委員を中心に、全保護者、全職員で、これからも、智恵を出し合っていきたいと思います。午後の研修会については、次号でお知らせいたします。